喉頭蓋脂肪腫の2例

小森 克彦・岩田 重信・高須 昭彦・内藤 健晴
森 茂樹・浦野 誠・横山 尚樹

Laryngeal Lipoma ; Report of Two Cases

Katsuhiko Komori, Shigenobu Iwata, Akihiko Takasu, Kensei Naitoh,
Shigeki Mori, Makoto Urano and Naoki Yokoyama

(Fujita Health University, School of Medicine)

Laryngeal lipoma which is unusual, was diagnosed in two patients : a 71-year-old female who had been suffering from progressive feelings of constriction in the hypopharynx and a 60-year-old female with a foreign body sensation in the hypopharynx. In both a large, bulky mass with intact mucosa was seen in the Vallecula extending from the epiglottis. The mass was surgically removed by means of a laryngomicro technique through the mouth under modified NLA. Light microscopic examination of both surgical specimens revealed mature lipocytes ; the diagnosis was simple lipoma. There has been no recurrence during the 2 years since surgery. We found only 14 cases of laryngeal lipoma reported in the Japanese literatures.

Key words : larynx, lipoma, laryngomicrosurgery

はじめに

皮下組織より発生する腫瘍の中では脂肪腫は最も頻度の高い良性腫瘍であり、脂肪組織の存在する全ての部位に発生する。しかし耳鼻咽喉科領域、特に喉頭に発生することは稀とされている¹⁾。我々は、最近喉頭蓋に発生した脂肪腫2例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

症例1 : 71歳、女性。

初診日 : 平成2年11月16日。

主訴 : 咽喉頭異常感(つかえる感じ)。

既往歴 : 糖尿病。

家族歴 : 特記すべきことなし。

現病歴 : 平成2年8月下旬頃より咽喉頭部に異常感に気付くも放置していた。症状軽快しないため、平成2年11月16日当科を受診した。嗄声、呼吸困難、嚥下障害な

どは訴えなかった。

全身ならびに局所所見 :

体格中等度、栄養状態良好。検査成績は末血・生化学検査、胸部X線、心電図に異常なかった。

耳鼻咽喉頭に異常所見なく、喉頭部は間接喉頭鏡下に、喉頭蓋舌根面に淡黄色で、表面平滑な鶏卵大の腫瘤を認めた。頸部側面拡大単純X線写真(図1)上にて舌根面付近に球形腫瘤陰影を呈していた。

治療および経過 :

以上より喉頭蓋嚢胞を疑い、平成2年12月17日入院、12月18日無挿管NLA変法麻酔下に腫瘍基底部より一塊として腫瘍周囲粘膜に切開を加え摘出した。術中、出血は少量で、底部の腫瘍と周囲組織との境界は不明瞭であった。

摘出標本の病理組織像は図2に示すごとく成熟細胞によく類似した脂肪細胞の集合がみられ、核の異型は認めず脂肪腫と診断した。

図1 頸部側面拡大単純X線写真
舌根面付近に球形の腫瘍陰影を認める。

図2 病理組織像(HE 染色 ×13.2)
成熟細胞類似の脂肪細胞の集合を認めるが核の異型は認めない。

症例2：60歳，女性。

初診日：平成5年8月16日。

主訴：咽喉頭異常感(ひっかかる感じ)。

既往歴：高血圧，右顔面神経麻痺。

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：平成5年7月中旬頃，感冒に罹患後，咽喉頭異常感に気付くも放置していた。平成5年8月16日症状軽快しないため当科受診した。嗄声，呼吸困難，嚥下障害などは訴えなかった。

全身ならびに局所所見：

体格中等度，栄養状態良好。検査成績は末血・生化学検査，胸部X線，心電図等に異常を認めなかった。

耳鼻咽喉頭に異常所見なく，喉頭部は頸部側面単純X線写真で図3に示すごとく舌根面付近に腫瘍陰影を認めた。また喉頭ファイバースコープにて図4に示すごとく喉頭蓋舌根面に淡黄色で，腫瘍表面は微細な血管の走行を認める平滑な鶏卵大の腫瘍を認め可動性がみられた。

治療および経過：

喉頭蓋嚢胞を疑い，平成5年9月8日入院，9月10日無挿管NLA変法麻酔下で喉頭直達鏡頭微鏡下に腫瘍の

図3 頸部側面単純X線写真
舌根面付近に球形の腫瘍陰影を認める。

図4 喉頭ファイバースコープ所見
喉頭蓋舌根面に淡黄色で，表面平滑な腫瘍を認める。

摘出を試みた。腫瘤の被膜に小切開を加え、内容の吸引除去を試みるも弾力のある実質性組織のため吸引できなかった。その操作中、腫瘤の沈下による気道狭窄を来したため直ちに緊急気管内挿管麻酔に変更し、再度直接喉頭鏡を用いて喉頭展開し、直視下に充実性の腫瘍を喉頭蓋舌根面基底部より喉頭ハサミを用い切除した。摘出腫瘍は図5に示したごとく表面平滑、球状で大きさは、 $48 \times 45 \times 50$ mmで、重さは、13.3 gであった。病理組織像(図6)は成熟細胞によく類似した脂肪細胞の集合がみられ、核の異型は認めず脂肪腫と診断した。

術後経過は良好で、術後2年以上を経過しているが、再発は認められていない。

図5 摘出標本
 $48 \times 45 \times 50$ mm, 13.3 g

図6 病理組織像(HE染色 $\times 33$)
成熟細胞類似の脂肪細胞の集合を認めるが核の異型は認めない。

考 察

脂肪腫は中胚葉性組織より発生するものの中で、結合組織がその発生母組織とされている良性腫瘍で¹⁾全身の脂肪組織の存在する部位であればどこにでも発生する可能性があり、良性腫瘍中、最も発生頻度の高いものの1つとされている。しかし、耳鼻咽喉科領域、特に喉頭に発生することは極めて稀である。我々の渉猟し得た範囲では、欧米では1854年 Holt²⁾の報告以来現在まで17例の報告をみるにすぎない^{3)~18)}。また、本邦では、1910年黒岩¹⁹⁾の報告以来本症例2例を含めて14例のみであった。明確な記載のあった11例につき表1に示した^{19)~28)}。

好発年齢：脂肪腫の好発年齢は、笠原¹⁾は40歳以上が70%を占めるとしており、Zakrzewski¹³⁾は8歳から81歳までの各年齢層に見出し、70歳代にピークを認めたと報告した。脂肪腫の発生は中高年齢者が大半を占めている点から非常に緩徐に増大するであろうという根拠になっている。本邦における喉頭脂肪腫症例11例も1例を除き全て50歳以上であり、種々の報告と一致した。

性差：本邦報告例では、男性8例(72.7%)、女性3例(27.3%)で男性に多い傾向が認められた。Zakrzewski¹³⁾によれば、喉頭脂肪腫70例中(3例性別不明)、男性48例(69%)、女性19例(27%)で本邦報告例と同様脂肪腫は男性に多い傾向を認めた。

発生部位：本邦報告例では、自験例を含め喉頭蓋に発生した症例が4例と最も多く、仮声帯2例、披裂部2例、仮声帯から披裂部が1例、声帯1例、喉頭腔が1例であった。

症状：喉頭脂肪腫の臨床症状は、発生部位により異なるが、異物感、咳嗽、嗄声、発声困難、呼吸困難などであり、一般に無症状期が長い。本邦報告例では、嚥下時の不快感が7例、嗄声3例、呼吸困難1例であった。

鑑別診断：線維腫、軟骨腫、神経鞘腫、血管腫、リンパ管腫、横紋筋腫などが上げられる²⁵⁾。

治療：治療法は外科的に完全摘出することであるが、腫瘍の発生部位、大きさ、進展範囲などにより経口的な方法と頸部外切開法とに分けられる。本邦報告例では、経口的な方法が7例、外切開摘出が4例であった。

病理組織分類：病理組織学的に脂肪腫は、単純性、線維性、化骨性、血管性、粘液性、紡錘型細胞脂肪腫、先天性、脂肪芽性、骨髄性、褐色脂肪腫に分類できる²⁶⁾。我々の2症例は、2例とも単純性であった。

表 1 喉頭脂肪腫の本邦報告例

報告者	年次	性別	年齢	主 訴	病 悩 期 間	発生部位	大 き さ	形態	治 療	組織型
竹田 ²⁰⁾	1955	男	63歳	咽頭部異常感	不明	右喉頭蓋谷	35×27×20 mm	不明	経口的摘出	単純性
飯尾 ²¹⁾	1957	男	7歳	呼吸困難	2ヵ月	右声帯	小豆大	有茎性	喉頭截開術	脂肪芽性
山田 ²²⁾	1978	男	59歳	のどのつかえ感	5年	喉頭蓋舌根面	45×30×20 mm (18 g)	有茎性	喉頭微細手術	単純性
神山ら ²³⁾	1983	男	59歳	嚥下時不快感	7年	左仮声帯	不明	半球状	喉頭微細手術	単純性
竹生田ら ²⁴⁾	1985	男	55歳	のどのつかえ感	不明	左被裂部	20×9×7 mm	有茎性	喉頭微細手術	単純性
永沼ら ²⁵⁾	1990	女	51歳	嗄声	不明	被裂部から 仮声帯	50×40×15 mm	不明	外切開にて摘出	脂肪芽性
松田ら ²⁶⁾	1990	男	57歳	嚥下時閉塞感	不明	左被裂部	50×30×5 mm (5 g)	不明	喉頭微細手術	紡錘細胞性
恒元ら ²⁷⁾	1992	男	58歳	嗄声	不明	喉頭腔	不明	不明	外切開にて摘出	不明
自験例	1992	女	71歳	咽喉頭異常感	3ヵ月	喉頭蓋舌根面	不明	有茎性	喉頭微細手術	単純性
野中ら ²⁸⁾	1993	男	68歳	嗄声	6ヵ月	右仮声帯	26×21×12 mm	不明	喉頭截開術	紡錘細胞性
自験例	1993	女	60歳	咽喉頭異常感	1ヵ月	喉頭蓋舌根面	48×45×50 mm (13.3 g)	有茎性	喉頭微細手術	単純性

予後：完全に摘出されれば喉頭脂肪腫の予後は一般に良好とされている。しかし、松田ら²⁶⁾は、57歳男性で再発を繰り返した症例を、神山ら²³⁾は再発を繰り返し脂肪肉腫になった2例を報告しており、Kapur¹⁵⁾は再発を繰り返し後に悪性化した症例を報告した。したがって摘出後も定期的な経過観察が必要と思われる。

ま と め

1. 喉頭蓋に発生した巨大脂肪腫を2例経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

2. 症例1. 71歳女性、喉頭蓋舌根面に表面平滑な腫瘤。喉頭直達鏡下に摘出した。症例2. 60歳女性、喉頭蓋舌根面に48×45×50 mmの表面平滑な腫瘤。挿管麻酔下に経口的に摘出した。

尚、本論文の要旨は、第18回日本頭頸部腫瘍学会と第75回耳鼻東海地方部会連合講演会にて口演した。

参考文献

- 笠原正男：脂肪腫。耳鼻 49 : 753~761, 1977.
- Holt B : Fatty pendulous tumor of the pharynx and larynx. Tr Pathol Soc London 5 : 123~125, 1854.
- Goldstein MA : Lipoma of the larynx. Laryngoscope 19 : 641~670, 1909.
- New GB : Fibrolipoma of larynx. JAMA 66 : 566, 1916.
- Walford A : Lipoma of larynx. J Laryngol Otol 45 : 548~550, 1930.
- Dixon OJ and Helwig FC : Lipoma of the larynx. Arch Otolaryng 14 : 284~290, 1931.
- Inperatori CJ : Fibrolipoma of the larynx ; report of a case. Laryngoscope 43 : 940~944, 1933.
- Flynn JA : Extrinsic lipoma of larynx. Laryngoscope 43 : 294~297, 1933.
- Davis EDD : A lipoma of the larynx. J Laryngol Otol 48 : 824~825, 1933.
- Birkett HS : Lipoma of the larynx-intrinsic in origin. J Laryngol Otol 49 : 733~740, 1934.
- Maconie AC : Lipoma of the larynx. J Laryngol Otol 65 : 426~433, 1951.
- Saunders GC : Lipofibroma of the larynx ; a review and case report. Tr Pacific Coast Oto-Ophth Soc 35 : 211~226, 1954.
- Zakrzewski A : Subglottic lipoma of the larynx ; case report and literature review. J Laryngol Otol 79 : 1039~1048, 1965.
- Eagle WW : Lipoma of the epiglottis and lipoma of the hypopharynx in the same patient. Ann Otol Rhinol Laryngol 74 : 851~862, 1965.
- Kapur TR : Recurrent lipomata of the larynx and the pharynx with late malignant change. J Laryngol Otol

- 82 : 761~768, 1968.
- 16) Di Bartolomeo JR and Olsen AR : Pedunculated lipoma of the epiglottis. Arch Otolaryngol 98 : 55~57, 1973.
- 17) Chen KTK and Weinberg A : Intramuscular lipoma of the larynx. Am J Otolaryngol 5 : 71~72, 1984.
- 18) Deschler DG, Lee K and Tami TA : Laryngeal infiltrating intrmuscular lipoma. Otolaryngol Head Neck Surg 108 : 374~377, 1993.
- 19) 黒岩福三郎 : 喉頭リボームの症例追加. 北越医学会会報 174, 1910.
- 20) 竹田礎智夫 : 喉頭脂肪腫の 1 例. 耳喉 27 : 704~706, 1955.
- 21) 飯尾孝子 : 喉頭に発生した非定型的脂肪腫の 1 例. 耳鼻臨床 50 : 869~871, 1957.
- 22) 山田一美 : 喉頭脂肪腫の 1 例. 愛医大 6 : 80~82, 1978.
- 23) 神山佳代子, 峯田周幸, 市村恵一, 他 : 喉頭の脂肪腫. 日気食会報 34 : 141, 1983.
- 24) 竹生田勝治, 石川紀彦, 辺土名仁 : 披裂部に発生した脂肪腫の 1 例. 日気食会報 36 : 187, 1985.
- 25) 永沼正道, 末野康平, 山田洋一郎, 他 : 甲状軟骨外に進展した喉頭脂肪腫症例. 耳喉頭頸 62 : 885~888, 1990.
- 26) 松田知愛, 森川郁郎, 進 武幹 : 再発を繰り返した喉頭脂肪腫の 1 例. 耳鼻 36 : 1022~1026, 1990.
- 27) 恒元秀夫, 千賀 脩, 宮川 信, 他 : 喉頭狭窄を呈した良性びまん性脂肪腫症の 1 例. 日臨外医会誌 53(増刊) : 355, 1992.
- 28) 野中 聡, 榎本啓一, 川堀真一, 他 : 喉頭に発生した spindle cell lipoma の 1 例. 喉頭 5 : 72~75, 1993.
- (原稿受付 : 平成 7 年 9 月 20 日
原稿採扱 : 平成 7 年 10 月 11 日
別刷請求先 : 小森克彦
〒470-11 豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
藤田保健衛生大学医学部耳鼻咽喉科学教室)